

令和7年度 学生による地域フィールドワーク研究助成事業  
研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学 医学部・薬学部
- ・所属ゼミ 富山大学 学術研究部医学系 医学教育学講座
- ・指導教員 高村昭輝 ・代表学生 宮澤正咲
- ・参加学生 石田瑞都、小野絢音、小柳芽吹、寺尾樹、伴旺祐、宮寺一穂

【研究題目】カフェを通じた地域住民のさらなる SDH 向上と効果の継続について～漢方カフェ PhaseⅢ～

### 1. 課題解決策の要約

少子高齢化が顕著な山間部地域である梅檀野地区にて、毎月一回医療系学生がカフェを企画運営する。和漢医薬の知識を元に、地元食材の使用や体験型のメニュー提供を行い、メニューをきっかけに地域との交流の場をつくる。過去2年間の研究では、地域に幅広く興味を持ってもらえるように内容を模索してきたが、カフェが実際に住民の健康の社会的決定要因(Social Determinants of Health 以下 SDH)に影響を与えたかは評価が難しかった。本研究では、カフェの認知度が上がったからこそ、地元の方を巻き込み、学生ありきではない交流の場の持続を図った。また、地域診断や SDH に関する指標調査を通して客観的な分析を行った。医療系学生だからこそ持つ視点を活かしカフェから派生したイベントにも注力し、地域住民の SDH と漢方カフェの効果进行分析した。

### 2. 調査研究の目的

医療系学生が行っていることの強みを活かし、企画や地域への影響の評価を行う。また、毎月同じ場所で4年間開催してきた知名度と継続性を活かし、ただ主催者側から一方的に開催することから、地域の特性を活かし地域の方とともに活動する方法を探る。

### 3. 調査研究の内容

#### 【過去の研究を受けての仮説】

本研究では、学生スタッフと地域住民のお客様、普段と異なる世代間の交流がうまれることを狙ったカフェを毎月開催してきた。Phase I では地域を知り活動を起こすこと、Phase II では様々な方に知ってもらい広げることに関点を当て活動した。3期目となり、学生ありきの企画ではなく、共創する仕掛けがあることで、学生が関わらない状態でも交流は継続するのではないかと考え、ただ活動を続けるだけではない「継続の仕方」に関点を当てた。そこで、学生との交流が、地域のつながりを表す Social Capital(以下 SC)に影響するという仮説を立てた。SC は、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴と定義される。SC が高まれば、学生がいない場面でも地域の交流やつながりが継続する可能性がある。本研究では、地域を改めて知る調査を行い、参加型企画を実践し、SDH の観点から評価を行うこととした。

#### 【活動内容】

通常営業としてせんだんの HILL での開催を継続した。毎月第二日曜日を漢方カフェの日と設定し、2025年4月～2026年1月まで、お盆休みで休業とした8月を除き計9回開催した。通常営業では、月替わりの薬膳メニューの提供を基本とし、クッキーデコレーションなど体験型の企画や、要望の多かった食事系のメニューを増やすなど、よりニーズに合うメニューに改良を続けた。また、会場施設内にある野菜直売所の野菜を使ったスイーツや特

製品の蓮根特集メニュー、近所でとれた梅を地域の方から教わったレシピで梅シロップにするなど、地域食材の使用を意識した。営業時間中には、お客さんとして来ていた鍼灸師さんからお灸やつぼについて教わる会や、後述する「手作りの日」やバーといったイベントも並行して行った。昨年度に引き続き出張開催も行った。特に梅檀野の活動を知ってコラボしたいと言ってくださった団体や、前回出張開催時にせんだんのでの活動を知るお客さんが来場されたイベントでの出店となった。福祉事業所のマルシェ(高岡市)や南富山駅前の夏祭り(富山市)では、多世代が食べやすいかき氷やクラフトコーラを販売した。アースデイとやま 2025(富山市)やお寺でのカフェ(南砺市)では、SDGs を意識したパフェや地元のパン屋さんとのコラボサンドイッチを販売した。

#### 4. 調査研究の成果

##### 【地域診断】

梅檀野地区の SDH を考えるうえで、改めて何がこの地域の強みであり課題であるのかを整理するべく地域診断を行った<sup>1)</sup>。地域診断とは、対象となる地域について SC などの客観的指標や細かい観察を通して、地域ごとの問題、特徴を把握すること<sup>2)</sup>である。

##### ① 地域の特徴・資源

農業地域が地区の多くを占め、食の資源として蓮根やサツマイモなどの特産があり、加工・商品化に取り組む生産者もいる。自然・文化資源として、竹細工文化や三助焼、欄間などの伝統工芸がある。さらにその技術を持つ人、植物や生薬(梅檀野の地名の由来とされるせんだん)に詳しい人など、人の知的・文化的資源も豊富といえる。

##### ② 生活環境の現状

令和 6 年度の人口は、1002 人(男 494,女 508)360 世帯であり、面積 9.44km<sup>2</sup>、人口密度 106 人/km<sup>2</sup>となっている。高齢化率は 42%以上で、今後も上昇が予想されている。若者や子育て世代の不足が、地域の行事や役員の担い手不足につながっているという声は実際に地域住民の話からも聞かれた。図 1 の通り中心市街地から距離があり、図 2 の通り森林面積が多く、車がないと生活が難しい地形と考えられる。<sup>3)</sup>

##### ③ 教育環境の変化

梅檀野に唯一の小学校は 1982 年に閉校・取り壊し、幼稚園は 2020 年に閉園となり、現在地域の小学生は別の学校に通学する。園舎はせんだんの HILL として残され、小学校跡地は振興会館として利用されているが、当時のことや地域の歴史を知る人は減っている。子どもその親世代も「地域を知る機会」は減少し、地域への帰属意識が育ちにくいと考えられる。これは、地域交流の場への参画機会の減少や、地域活動存続の難しさにつながりうる。

##### ④ 福祉・医療の取り組み

梅檀野は、百歳体操、茶話会、地域食堂など、定期的に居場所づくりが行われており、高齢者向け支援は比較的充実していると考えられる。また、電子回覧板の普及で積極的に活動への呼び込みも行われている。しかし、車を手放す世代、すなわち梅檀野地区の人口の多くを占める高齢者にとって移動が大きな課題となっており、コ

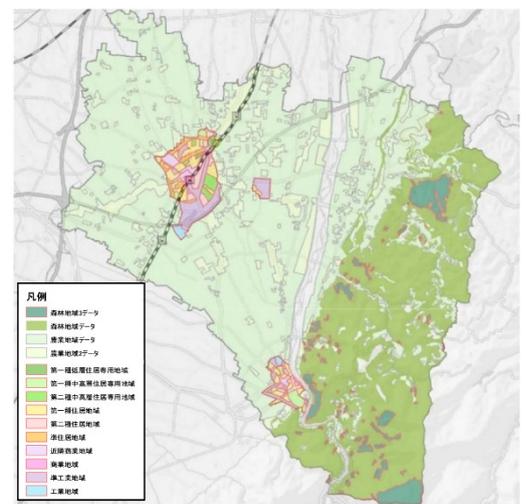


図 1 用途地域図

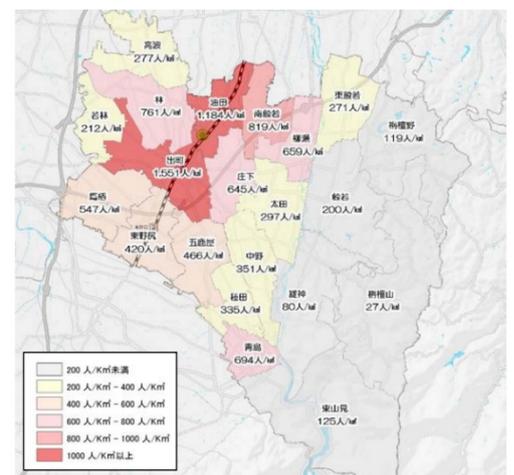


図 2 令和3年時点地区別人口数

出典 3) 砺波市文化財保存活用地域計画

コミュニティバスも本数は限られ、自治振興会のニーズ調査には依然として交通手段充実を望む声が寄せられる<sup>4)</sup>。実際の認知・利用にはまだ課題があると考えられ、支援はあっても情報が届いていない可能性も示唆される。

以上のことから、全体として見える課題として、住民によるつながりへの試みは行われているものの、将来的な不安は明確で、高齢化や担い手不足の問題は深刻化すると考えられる。現状の地域の試みを実際につながりとして「活かす」ために、地域資源とコラボする学生ならではの関わりは梅檀野のニーズと合うのではないかと分析した。また、4年間の活動で実感してきた梅檀野の強みとして、地域を良くしたい人が多く高齢層にも意欲的で行動力のある人材が多いため、横のつながりが強い印象がある。学生の我々がやりたいと言えば全力で応援いただける雰囲気があるように、外部を歓迎する土壌もあると考えた。

### 【地域での交流が自走するための工夫の実践】

学生が主催する活動の課題は持続性が低いことである。漢方カフェ自体も、4年目の活動で後輩に引き継がれてはいるものの、学生ありきではその地域で開催する意義が高くない。そこで、地域の方に継続的に来ていただく工夫や地域の方の強みを活かすきっかけをカフェに取り込んだ。具体的には以下のような取り組みがある。

#### ○「知っているも実際足を運ぶには至らない」層への新たなアプローチ

過去にお客さんから寄せられた「居酒屋のような場もほしい」という声から、カフェというテーマでは行きにくい方へ趣向を変えることも意識し、カフェとは時間帯を変えた夕方にバー企画を開催した。お客さんからは、「ここが公民館だなんて思えない」「家にいたら絶対こんな体験できなかった」と非日常的な感覚の感想や、「昔、仕事で行った東京を思い出す」「ここに来るとちょっと自分が若返った感じがする」といった思い出も伺えた。「季節ごとにやってほしい」「また顔を出す理由ができた」「飲み物じゃなくて、外に出るきっかけをもらった気がする」といった声も寄せられ、場や体験、新たな交流を意識された反応が多かった。

#### ○地域の特徴とのコラボ

地域の方の蓮根畑で「蓮根掘り体験」をさせていただいた。梅檀野の特産品である蓮根は畑の管理が重労働で畑を閉じる人も増えてきている。教わりながら、翌日のカフェの材料として蓮根を収穫した。地域の恒例行事である公民館祭りの日に合わせてカフェを開催し、蓮根饅頭や蓮根ケーキといった一風かわった蓮根特集メニューを提供し、多くのお客さんと地元特産品の新たな活用法をお話できた。

#### ○地域の人を知り巻き込む企画

「手作りの日」と題し、カフェに手作り品を持参された方に地元食材を使ったケーキをプレゼントする企画を行った。せんだんの HILL にはもともと木工品や布小物など、地域の方が手作りした作品が無人販売でおかれていたものの、その作者に直接会える機会は無かった。過去に販売所の作品の作者がカフェに来店し、昔の仕事が活かされていることや、趣味だがかなり凝った材料でこだわっていることを教えてくださった。そこで無人販売だけでなく、作品に込められたエピソードや想いを聞くことができる場を作りたいと考えた。さらに、販売するには気が引けるからと隠した特技をもつ住民がいるのではないかと考え、地域の人という資源を知るべく企画を行った。お三方の作品の持ち込みがあり、カフェの装飾に使えないかというアイデアが出た。さらに手芸品の写真を見せてくださった方には、ぜひ実物を見せていただきたいとお願いした。この際、連絡先を聞くのは互いにハードルがあったものの、「来月のカフェの時に持ってきます」と言っていただいたおかげで継続的にやり取りすることが可能になり、毎月開催し続けてきた甲斐があった瞬間であった。実際に翌月も来店いただき、作り方を教わりたいと話していたところ、別のお客さんが私もぜひとおっしゃり、次のカフェでは講座として作り方を教わる会を行う運びとなった。

#### ○地域の活動に参加する

昨年度に引き続き、公民館祭りやハートフルデー(敬老会)に呼んでいただいた。中でも、地域の役員などが集

まる新年会では、カフェメニューである薬膳お屠蘇の試飲を提案したところ、自治振興会の方から乾杯の挨拶の際に使おうとご提案いただいた。50名程度の来場者全員に飲んでいただき、全体の前でメニューの説明と漢方カフェの挨拶をする時間をいただいた。同日開催のカフェにも多くご来店いただき、「薬膳と聞いておいしくなさそうなイメージがあったけれど気に入ったのでまた来月買いに来たい。」と次回のメニューが自然と決定した。



写真1: 夏祭りでの出店



写真2: 「手作りの日」告知



写真3: 薬膳フルーツポンチ

### 【「医療系学生と話す」ことの仕掛け】

過去の phase では、学生がカフェ営業で手一杯になってしまい、地域住民と話す時間が思うように取れないことが課題であった。また、お客さんとの会話の中で薬膳メニューから体調の話になることはあったものの、「興味のある人」にしかなかなかアプローチできずにいた。そこで「今月の質問」と題して、注文時に簡単なアンケートに回答してもらい、来客数を数えるとともに、自然と健康に関する意識調査と、そこから生まれる会話のきっかけとした。

実際の質問と回答の一部を示す。

花粉症で悩んでいますか？	悩んでいる	4	気にならない	13
5月病になったと感じたことはありますか？	ある	3	ない	6
梅雨のジメジメのお悩みは？	頭が痛い	4	だるい	10
	冷たい	8	暑くても	5
夏に飲むものは？	ものが多い	14	温かいもの	2
自分なりの夏の暑さ対策は？	ある	8	ない	2

表1: 「今月の質問」の結果

### 【ソーシャルキャピタルの評価】

#### ・方法

梅檀野地区の電子回覧板を用い、オンラインでアンケートを行った。アンケートでは、住まい、性別、年齢などの基本属性に加え、漢方カフェが SC に影響を与えることの波及効果を測るため、漢方カフェに行ったことがあると答えた方に、地域への愛着とカフェ以外の活動への参加を尋ねた。実施期間は2026年1月15日～1月28日、対象者は電子回覧版に登録する800人であった。

#### ・結果

全体の対象者の内、回答があったものは90件(回収率11.3%)であった。回答のあった90件のうち、カフェを知っていると答えた人は88人で回答者の97.8%であったが、そのうち実際に行ったことのある人は表2の通り、46人と全体の約半分であった。

漢方カフェに行ったことが		ある(n=46)	ない(n=42)
住まい	梅檀野地区	42	40
	砺波市	4	2
性別	男性	23	31
	女性	23	11
年齢	~20歳	0(0%)	0(0%)
	21~40歳	3(7%)	2(5%)
	41~64歳	16(35%)	21(50%)
	65~74歳	14(30%)	16(38%)
	75歳~	13(28%)	3(7%)

表2: 「富山大学生の地域調査」回答90件(2026/1/29時点)

図1:あなたが住んでいる地域に愛着がありますか？

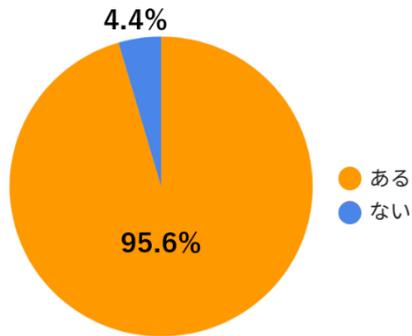


図2:漢方カフェを知る前に比べてあなたが住んでいる地域への愛着は変化しましたか？

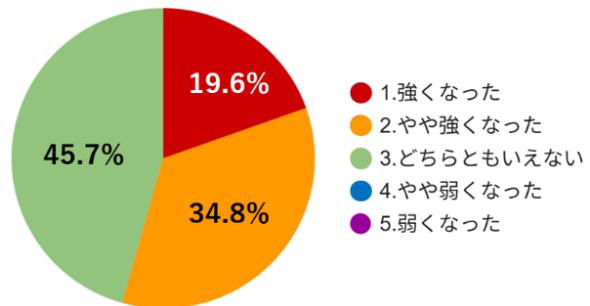
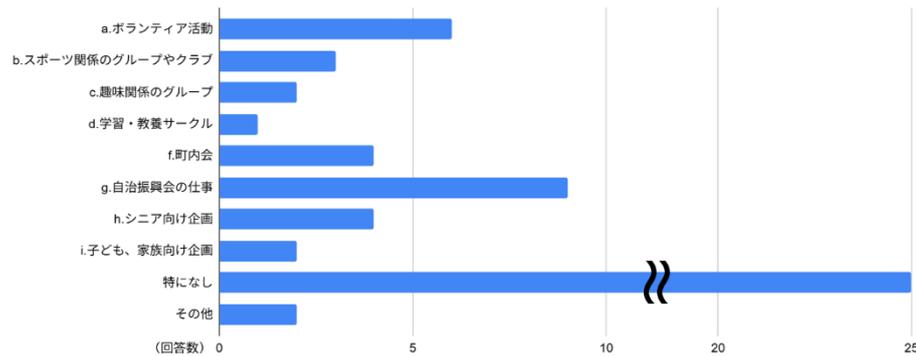


図3:漢方カフェに行くようになってから行く様になった活動はありますか。(複数選択可)



漢方カフェがSCに影響を与えることの波及効果を測るべく、漢方カフェに行ったことがあると答えた方に、地域への愛着とカフェ以外の活動への参加を尋ねた。地域の愛着についての回答は、あるとの回答が43人、ないと回答が2人であった。漢方カフェに行くようになってからの愛着の変化を訪ねたところ、54.4%が強くなったと回答した。さらに、漢方カフェに行くようになってから行くようになった活動として、自治振興会の仕事をはじめとした複数の活動があげられ、41.3%が漢方カフェに参加してから何かしらの活動に参加するようになったと回答した。

### 【考察】

地域診断を行う中で、漢方カフェが活動を始めた2022年に閉園となった幼稚園がせんだんのHILLというコミュニティスペースとして運用され始めて1年の時期であることが、梅檀野地区の転換点であったと考えた。少子高齢化・過疎化が進む地域で「このままではよくない」という意識の表れから、人が集う開けた場がつけられた。地域の活性化には「よそ者・わか者・ばか者」が必要ということがよく知られている。地域がより開放的になるタイミングと一致して、大学生という「よそ者」が活動を始めたことで、地域自体の変化とともに受け入れられてきたのではないだろうか。その結果が、漢方カフェに行ったことで愛着が増したと答える人が半数を超えるという結果につながったととらえる。愛着は個人差のある価値基準であり、もともと地域への意識が高い人がカフェに来ていると考えることもできるが、明確に強くなったと答える背景には、大学生という外部からの新しい取り組みが継続的に自立した活動となっており、一時的なものではなく身近になったことで、今後も住み続けたいと思えるような「期待」を感じられたからではないかと推察する。さらに、漢方カフェに行くようになってから行く様になった活動はありますか、という問いに対し、新たな活動参加が複数みられたことは、SCの波及効果<sup>5)</sup>と考えられる。漢方カフェに行ったからと言って、必ずしも他のイベントに直結するとは限らないが、より多様な世代・属性の人が来店する漢方カフェに足を運ぶことは、その後の他の交流の場へつながる可能性を高めている。今後の課題として、漢方カフェに行ったことがないと答えた方に、どのようなイベントがあると行くかの質問に対して、内容よりも一緒に行く人がいたら行くという回答が複数件あった。また、行ったことがある群の男女比は均等であったが、行ったことがないという群に

においては男性の割合が高かった。これは高齢男性が交流の場に出にくい<sup>6)</sup>というSDHに関わる課題が顕著にみられた点だととらえ、今後の漢方カフェの地域アプローチの改善に活かしたい。

## 【研究の限界】

アンケートは電子閲覧板によるオンライン回答であったため、回答可能な人に回答の偏りがあった可能性がある。また、回答者は漢方カフェに関心を持っている層であり、地域全体の意見とは言い切れない可能性がある。

## 5. 調査研究に基づく提言

医療系学生として、地域には病気を治す場だけではなく、生活・季節・体調・記憶を語る場を作ることが、地域を知ることを促し、互いに関心を持つことにつながり、SDHに重要と考える。特に、高齢化が進む地域で大学生との会話を切り口に、話す場をつくることで「経験が自身の健康につながる価値になる」構造をつくれる。今回我々が取り組んだ梅檀野地区は、「困っているから助けてほしい」という地域ではないからこそ、住民主体になるように、地域人材の取り組みに学生が触媒役になることを意識したことで、今後の自立した活動につながると考える。これからのつながりの助燃材として、活動で築かれたご縁を大切にしながら、新たな取り組みに挑戦していきたい。

## 6. 課題解決策の自己評価

アンケート調査の中で「継続してくれてありがとう、これからも続けてほしい」という旨の回答が複数寄せられた。カフェの知名度の浸透とともに、継続的に医療系大学生が活動しているということを知りていただいていること自体が、健康への意識や困ったときに相談できる場があることの認知を促しているのではないかと考える。実際にカフェの場で地域の方から次回以降の取り組みを話が出たり、地域の方が主体となった企画の開催につながったことで、目標であった地域の方を巻き込み自走するイベントにしていくことの成果を大きく感じた。一方で、助成金を活用し、カフェの紹介やレシピを記載した冊子を作成予定であったが、内容の選定が思うようにいかず予定通り作成することができなかった。これは、従来の宣伝方法では来店という行為に結びつかない人に様子を伝え、行くハードルを下げる狙いや、会場だけでの交流に終わらず持ち帰って健康についての話題が出るきっかけをつくる目的があった。その分の助成金は研究内の他の企画に充てることができたが、機会と予算を活用できなかった反省を忘れず、今後地域のニーズにあった形に残る「持って帰れるもの」の作成に取り組みたい。

【謝辞】梅檀野地区関係者の皆様、ご指導いただいた高村先生、松本先生、近藤先生に心から感謝申し上げます。そして、学生運営メンバーのおかげで活動を続けることができました、ありがとうございました。

## 【参考文献】

- 1) 地域診断ガイドライン, 日本公衆衛生協会, [https://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04\\_2\\_10\\_02.pdf](https://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04_2_10_02.pdf)
- 2) 第7期介護保険事業策定のための日常生活圏域ニーズ調査データの分析支援プロジェクト, 日本老年学的評価研究機構, <https://www.jages.net/300bm/chikishindan/>, 2026年1月29日時点
- 3) 令和6年度砺波市文化財保存活用地域計画, 富山県砺波市教育委員会
- 4) 梅檀野の今後を考えるアンケート, 砺波市梅檀野自治振興会, 2025年11月
- 5) ソーシャル・キャピタルが地方創生に与える影響—市区町村GISデータによる空間計量経済分析—, 田中勝也ら, 内閣府経済社会総合研究所”経済分析”第197号 2018年
- 6) ”高齢者の「フレイル」対策運動不足だけが課題ではない「交流機会や外出頻度」の減少が影響”, 日本肥満症予防協会, 2023/3/27